

地域とともに、 農業で生きる

職場
ルポ

—株式会社 センコースクールファーム鳥取—



●特集● 農業と障害者

(文) 清原れい子 (写真) 小山博孝



取材先データ

株式会社 センコースクールファーム鳥取

〒682-0722 鳥取県東伯郡湯梨浜町はわい長瀬1350

電話 0858-35-5238 FAX 0858-35-5268

■代表取締役社長:小笠原 雅明

■設立:2010(平成22)年4月

keyword: 身体障害、精神障害、知的障害、特例子会社

POINT

- ① 廃校を利用し、県や町とも協力
- ② 親会社の物流量減少を見据え、CSRの観点からも農業事業への参入を決意
- ③ 障害の状況に応じて、各自ができる作業を担当

WORKSHOP REPORT



成田信和湯梨浜営業所長

旧小学校を改築、事業所に

鳥取県のほぼ中央、日本海の海岸線沿いを走る山陰道の「はわいインター」近く。今回の訪問先「センコー株式会社」（本社：大阪市）の特例子会社「株式会社センコースクールファーム鳥取」がある。同社は、廃校となった旧羽合西小学校を事業所として活用し、2010（平成22）年4月に設立された。

親会社のセンコーは、全国に約400カ所の事業所、約9千400人の従業員、3300台余の車両を有する、総合物流の大手企業である。大阪市に本社がある物流会社なぜ農業に、しかも鳥取に設立したのか？その辺のいきさつから現場の責任者、湯梨浜営業所長の成田信和さん

に尋ねた。

「私は、設立後の2012年にこちらに着任しました。センコーでは、国内の物流量が年々減少して行くなかで、『これからは、物流会社も『ものづくり』をして、自分たちの運ぶものを自分たちで作ろう』との方針のもと、農業事業への参入を検討していました。CSR（企業の社会的責任）の面からも、福祉・障害者雇用に目を向けようとの考えがあったのだと思います。そのころ、鳥取県の農産物アンテナショップへの流通を検討する機会があり、つながりができたと聞いています」

たまたま、鳥取県にはセンコーの事業所は1カ所もなかった。少子化による小学校の統廃合で町内3校の廃校が決まり、跡地利用を検討していた湯梨浜町からの誘致もあり、鳥取県・湯梨浜町との間で、2010年3月に進出協定を締結した。



理科室は野菜の選別・梱包場



ほかの教室では、キノコの菌床栽培も

旧校舎の教室を利用したの野菜栽培



旧校舎の教室を改造して、キノコの菌床栽培を行うクリーンルームや冷蔵施設、食品加工施設をつくり、校庭には水耕栽培用の6棟のビニールハウスを建設した。



建物の1階は車いすで移動できるようにスロープを設置し、出入口はスライドドアや自動ドアに変更、車いすトイレもつくった。

2010年8月、車いすの人や知的障害の人たち10人で、細ネギの水耕栽培と黄金タモギ茸たけのこのキノコ栽培を始めた。その後、鳥取県中部地域を中心に社員を採用して、現在は障害者22人（知的障害者12人、身体障害者6人、精神障害者4人）、高齢者2人と一般2人を含む総勢28人となっている。

それぞれに見合った仕事をみつける

障害者の社員は、福祉施設から入社した人、特別支援学校から新卒で就職した人、他企業から転職してきた人と、出身はさまざま。知的障害や精神障害の人たちは3カ月間のトライアル期間を設け、作業ができるかを見極めたうえで雇用をした。本人の適性や能力を考慮して職場配置を行い、当時は大勢働いていた高齢者が各チームのリーダーとなり、作業の指導やサポートを行った。

「私がきてから同時期に採用した3人は、より能力を発揮できるように、配置後に一部、仕事を入れ替えたりしました。基本的には障害別の配慮はしていませんが、身体障害の人は重いものを持ちたり、ハウスに常に入入りする作業は負担が大

きいので担当していません。精神障害の人が2人退職しましたが、定着率はいいのではないかと思います。この2年間は、新規の雇用はしていません」

成田所長は、特例子会社に異動する前はトラックの配車や輸出入の申告をする通関の仕事をしていた。米農家で育ったが、水耕栽培もキノコ栽培も初めての経験だった。

「通関の仕事をしていたとき扱っていたのは主に海運貨物です。海上輸送では最低でも何百トンといったものを扱いますが、ここでは100g、200gといったものを扱う世界です。百トンが何千万円、ここでは200gが何十円ですから、最初はぴんとこなくて、専門用語もわかりませんでした。水耕栽培やキノコ栽培はむずかしいことも多いですね。農産物はすべてを均一に効率よくは扱えませんし、売れども市場価格に左右されるなど、事業の面ではいろいろと大変です」

障害者との出会いも初めてだった。「最初は、わからなかったのですが、日々関わっていると、障害のある方にはそれぞれ得手不得手があるのだというのがわかってきました。それは、知的・精神・身体の障害には関係なく、それぞれ個人によってできることが違うということで、正直なところ、最初は戸惑うことも多かったです。いかにそれぞれに合った仕事をしてもらうかに気を配っています」



ビニールハウス担当の山崎祐次さん

勤務時間は、9時15分から16時15分、または9時30分から16時30分の6時間。スタート時は、給料は一律だったが、一昨年後期からは、勤怠状況や個人の能力を評価した時給の設定に変更した。

「本人たちのモチベーションにもつながるだろうという意味も含めて、いまはそれぞれが勤務状況にあった給料となっています。われわれが評価をしています、各自に面談をして評価内容を説明しています。評価に関しては、障害のあるなしに関係なく、一人ひとり見ていかなければ

ならないという点で、むずかしいのは同じですね」

作業はチームで担当

生産品目は試行錯誤して、現在はチンゲン菜、コマツ菜、ルッコラの葉物野菜と、マイタケ、シイタケのキノコ栽培がメインとなった。そのほかマイタケ、キクラゲ、タケノコなどの水煮加工と、近くにビニールハウスを借り、露地栽培を行っている。作業は、「水耕栽培・キノコ栽培・水煮加工」、「梱包・人工光による栽培・露地栽培」のチームに分かれて行う。

梱包チームは、収穫を終えたチンゲン菜やシイタケなどを選別し、きれいに整

え、梱包していく。葉の廃棄部分は牛のエサになるそうだ。

水耕栽培チームは自分たちで種まきし、育苗を行ってからビニールハウスで生育し、1カ月から2カ月で収穫する。山崎祐次さんがチンゲン菜の収穫を終えたベツド（生育用の栽培設備）のビニールの張替えをしていた。設立時に就職した山崎さんは、キノコ栽培、梱包の作業を経験後、水耕栽培の収穫と管理を担当している。

「ビニールが破けているところを見つめるのがむずかしいです」

昨年夏、免許をとり、車を買った。「親と自分と半々で出しました。自分の分は現金で払ったという。中学時代から練習しているジャベリックスローという槍投げ

に似た競技で、全国障害者スポーツ大会で優勝したこともある。「注意深く、ちよつとした不具合を見つけるのが上手です」と成田所長。就職を目ざす後輩たちに仕事の経験を語っている。

キノコ栽培チームは、温度や湿度が調節できるクリーンルームで菌床栽培を行い、生食用のほか、キノコ乾燥品をつくる。

露地栽培チームは現在はトマトの栽培をしている



トマトの露地栽培

食品加工部門で働く吉田政治さん



る。人工光による栽培のチームは、市場
であり見かけない野菜を担当。食品加
工室では、マイタケ、キクラゲ、タケノコ
などの水煮加工を行い、学校給食用の食
材として出荷している。ここで働く吉田
政治まさはるさんは、農業高校での臨時職
員などを経て、2011年10月に
入社した。
「タケノコのパック詰めは、千切
りや乱切りや短冊切りはピシッと
できる。ホールという半分に切っ
たものは、袋がゆがむのでむずか
しい」
給料は家に入れ、小遣いで車の
雑誌などを買うとか。マイカーで
通勤し、休日には近くの温泉場に
温泉を汲みに行く。今年50歳。「定
年まで働きたいです」
成田所長は、吉田さんの最近の
仕事ぶりを認めている。「露地の作

業もやってもらいましたが、人の輪に入る
のが苦手だったようで、うまくいきませ
んでした。加工の仕事では、自分から進
んで、1つの仕事が終わったら次の仕事を
するようになり、仕事も順調です」
収穫した野菜は、委託生産先の岡山県
倉敷市の青果会社のほか、鳥取市、倉吉市、
米子市の青果市場、JAの直売所、地元
のスーパー、道の駅、地元の旅館、ホテル、
飲食店などに出荷している。

会社外の問題は、 支援センターに

障害者の職場定着には、地域の障害者
職業センター、障害者就業・生活支援セ
ンター、ハローワーク、出身学校、保護者
などとの連携が欠かせない。センコースク
ールファーム鳥取の支援には、設立当初
から社会福祉法人・鳥取県厚生事業団の
「障害者就業・生活支援センターくらし」
が関わってきた。定着支援員の安藤麻紀
さんは月1〜2回、様子を見にくる。

「『元氣だった?』とか、『心配事ない?』
と、相手が構えないように笑顔で話し
かけるようにしています。こちらから声
をかけること、話を聞いてあげることが大
事かと思えます」

何か必要があれば、主任相談員の福田
徹さんが相談に乗る。

「仕事をつまづき、心の病など、定着
支援員からの情報や、会社からの連絡が

あったときに訪問しています。支援では、
本人の気持ちを聞いてあげることが大事
だと思います。家族に伝えるなどの調整
をして、働く気持ちを盛り上げていくよ
うにしています」

成田所長が気をつけているのは、精神
障害の人たちだという。

「二人ひとり違いますので、どういうふ
うに指導したり、注意したらいいのか。
そこを探っていくのが大変で、配置はよく
考えて行きます。現在は4人が人工光裁
培のチームで、キノコ、水耕栽培で働いて
います」

グループホームで生活する人が1人。



「障害者就業・生活支援センターくらし」の
福田徹さんと安藤麻紀さん

WORKSHOP REPORT



学校の
玄関に残る
校名看板



ほかの方は自宅からで、マイカーとバス利用、家族の送迎もある。会社としては、プライベートな部分には立ち入らないようにしているのだとか。

「家で何かがあったなどの相談はありませんが、『プライベートなことは会社としては相談に乗れないので、支援センターの人に相談してみたら』と話します。支援センターには、『こういう問題を抱えているので、話を聞いてもらえませんか』とお願いします」

多くの会社と関わりがある福田主任相談員と安藤定着支援員には、どんな会社に映っているのか。

「この仕事は障害に関係なく、わけ隔てなくできる仕事だと思えます。班ごとにだれかを中心に自然にまとまっている気がします。いい製品をつくらうというのが根本にあると感じますね」

「成田所長がみなさんの様子を見てくださっていて、とてもいいと思っています」

障害者雇用への感想を、成田所長に聞いた。

「最初はどうか接しているのかわからなかったのですが、甘やかすすぎってしまったこともあったと思います。本人のためにも、それではいけないと

反省して、いまは厳しさが必要なときは厳しく接するようにしています。何人かには話したことがあります。会社としてはそれぞれの障害に配慮しているつもりです。さらに、『障害者だから、これはできません』と、障害があることでチャレンジを諦めたり、チャンスを減らしたりするような発言はしないほうがいいよ、と話しています」

親会社の 実験ラボとして

センコーは、目ざすべき企業像を「国内外から信頼される流通情報企業をめざす」と定め、CSR経営を経営方針の1つに掲げている。センコースクールファーム鳥取を設立した結果、障害者雇用率は3・03%に達した。

センコーでは目下、農業に本格的に取り組もうと農業事業化プロジェクトがスタートしている。成田所長はいう。

「ここ1〜2年で事業化して、どこかに植物工場のものを作って生産しているところと取り組んでいます。センコーはタンカーやタンクローリーは持っていますが、保冷車は持っていません。そういうことも含めて、野菜の物流ネットワークを考えています。ここには、ミニセロリなどの実験ラボがあり、事業化するための研究を行っています。外のハウスで生産できるのであれば、つくっていききたいですね」

高齢化で作業がむずかしくなった農家から畑を受け継ぎ、鳥取特産の二十世紀梨の栽培も始めた。地域に密着した企業として存在している。

「町から廃校を借りていますので、町とも密接に連携しています。鳥取県は地産地消を目指していますので、チンゲン菜とコマツ菜は町内の学校給食の注文をいただいています。タケノコの水煮も学校給食に提供していますが、鳥取県農林局林業振興課の竹林整備事業と連携し『中部ととりタケノコ振興会』の一員として、タケノコの産地化、竹林の再生も目ざしています。水耕栽培をしている地元の福祉施設から就職した人もいます。そういう意味では、地域とのつながりがありますね」

これからは、もつと採算性を見直し、利益を出せるような作物をつくっていきたいと考えている。

「現在は赤字で、親会社に援助してもらっていますが、早く売上と経費をゼロベースに持っていきたいですし、品質のいいものを生産したいですね。『自分たちのつくったものが売れて、会社も儲かっています』と自信を持っていえるように、気持ちよく働いて、ここで仕事をしてよかったと思ってくれようになればと思っています」

会社案内には「地域と、農業の、明日を見つめて。」とある。高齢化、過疎化が広がる地域で、地域の核となる企業として、ぜひ成長してほしい。